シュミットの「自然」概念をめぐって（その一）

清水多吉

一、フランクフルト学派の近況

私自身、かなり多くの場所で発表してきたことであるが、[1] フランクフルト学派は、ホルクハイマーがイタリアに近い南スイスに引退し、アドルノがそれほどの年でもなかったのに死去してしまった現在、あまり実りある学問的労作を生んでいるわけではなく、かなりの寂しさは覆いがたい状態にある。そもそも、フランクフルト大学の社会研究所に拠る、いわゆる「フランクフルト学派」の思想史的栄光は、三〇年代、四〇年代にこそあるのであって、世俗的な名声を得るにいたった五〇年代、六〇年代にあるのではない。その内的理由についても、既にかなりの場所で私見を発表してあるので、参照してもらえれば幸いである。いずれにしても、ホルクハイマー、マルクーゼ、フロム、アドルノといった面々の戦後史、あるいは戦後の思想的営為は、端的に言うなら、もともと戦前の思想的、学問的遺産の上に成り立っていたこと故、昨今のフランクフルト学派の衰退は、二重の意味で当然のことといえないこともない。

勿論、いわゆる「フランクフルト学派」の戦後における優れた後継者がいないわけではないし、そのうちの幾人か

はかなりの業績を示し、既に全ヨーロッパ的規模での名声を博してもいる。さしづめ、その代表者として、哲学におけるフェッチャー（Iring Fetscher 1908）やハーバーマス（Jürgen Habermas 1922）、心理学におけるミッチャーリッヒ（Alexander Mitscherlich 1908）などをあげるのに誰れしも異存はないであろう。だが、かなり多彩な才能の持主であり、対社会的な発言でも、それなりに強力な影響力をもっていたはずのこれらの人々でさえ、この数年間は目立った労作を出しているわけではない。この数年間の大学闘争が、マルクス主義に少なくとも何ほどか依拠していた者に対して与えた衝動は、実に絶大なものがあったといってよい。日本の場合も同様であったが、日本とは別様の近代における権威主義が牢乎として、社会の全域に浸透しているドイツの、しかも最も権威主義的な存在としてのオルデナリウス（正教授）としては、その衝撃力の強さははかり知れないものがあったであろう。フェッチャーやハーバーマスをはじめとする現在のフランクフルト学派の学問的空白は、彼らより若干若い世代に属するシュミット（Alfred Schmidt 1931～）[2]についてもあてはまる。

シュミットは、言うならば、ハーバーマス以上に忠実なフランクフルト学派の後継者といってよいだろう。現にホルクハイマーが南スイスに引退した現在も、フランクフルトにあってホルクハイマーの私的助手（七〇年度現在、フランクフルト大学講師）をつとめ、ホルクハイマーの印税事務までとりしきっている。それのみならず、シュミットの活躍は、あの年報の復刻編纂の責任者としての仕事をはじめ、大学の講義のみならず、労働者市民向けの講座においても、フランクフルト学派、特にホルクハイマーの「批判理論」をとりあげるといった具合である。しかし、そのシュミットにとってもまた、この数年間の空白は、彼の先輩たちと同様、覆いがたいものがある。ここにとりあげる彼の代表作『マルクスの学説における自然の概念』[3]は、五〇年代後半、ホルクハイマーとアドルノとのもとにあって、彼の博士論文としてまとめられたものであり、六二年度に出版されたものである。非常な名声を博しながら、そ

の後長い間絶版になっており、ようやく昨年（七一年）、彼自身の空白を埋める形で、新しい論文（といっても、これまた既出の論文[4]であるが）を付して、新版として出されるにいたったわけである。この著作は、彼が単にフランクフルト大学に席をもっているという意味での後継者というより、むしろ、内在的な後継者であることを証しだてた記念すべきものであるといってよい。その上、この著作は、彼がいわゆる西欧マルクス主義者につながるべき位置を獲得したものであるといってもよいであろう。

＊　＊　＊　＊　＊

ところで、彼のこの著作をとりあげる前に、何故にマルクス主義において「自然」の概念が問題になるのかを、少しく思想史的に整理しておかねばなるまい。従来のマルクス主義哲学、特に二〇年代、三〇年代までのマルクス主義哲学には、「自然」の概念をめぐってある強固な思想的系譜があった。しかも、この系譜は政治的優位性に立っていたが故に、不幸にも正統なマルクス主義としての位置をしめ、またそのように機能してもきた。その系譜を、今、いささか強引なくらいまでに整理してみるなら、エンゲルス――レーニン――デボーリン――スターリンの系譜と呼んでもよいであろう。この系譜の論敵であるフランクフルト学派に言わせれば、ソヴェト・マルクス主義ということになる。この系譜にとって、問題の所在は次のようなところにある。というのは、この系譜のイデオローグたちは、まず、人間の実践の対象としての自然（対自的自然）を離れた自然（即自的自然）が存在すると断定する。やがてこのような即自的自然をほぼ物質と等置するようになるのであるが、それはともあれこの即自的自然にせよ、物質にせよ、それら相互の間に弁証法的関係が存在しており、この事実は単に自然界、物質界のみならず、われわれ人間の社会や歴史においても等しく認められるというのである。何故なら、これらのイデオローグにとって、人間の社会や歴史も自然界、物質界のあり様と何ら質的差異をもつものではなく、むしろ前者は後者のあり様の反映を受けたものと

考えられるからである。

このような思想的系譜の源流は、エンゲルスの『自然の弁証法』や『アンティ・デューリング論』にあり、レーニンの『唯物論と経験批判』を経て、デボーリンの『唯物弁証法と自然科学』、スターリンの『弁証法的唯物論と史的唯物論』にいたって集大成される。特にスターリン的段階においては、即自的「自然」（まったく物質界とおきかえられる）を支配する弁証法的唯物論がマルクス主義の基本的哲学であり、史的唯物論とは、弁証法的唯物論の歴史への適用例であるにすぎない、とされることになる。

このような思想的系譜に対して、異義を申したてた最初の人物は、おそらくルカーチであろう。ルカーチに始まるソヴェト・マルクス主義に対する批判の系列は、ルカーチ――コルシュと続き、この系列にフランクフルト学派も連らなることになる。この系列にとって問題の所在は次のようなところにある。というのは、マルクス主義にとって自然とは、本来、社会化されるべき自然（ないしは社会化された自然）、歴史化された自然のことであって、即自的自然のことではない。まして、この即自的自然が物質界と等置されるなどということは、本来のマルクスの主張からはほど遠いものであるし、即自的自然や物質界にまで弁証法論理を適用させるのは、弁証法の誤まてる拡張解釈だというのである。このような誤まてる拡張解釈は、当のエンゲルスのみならず、ヘーゲルにまで一端の責任があるという。

二〇世紀前半のマルクス主義にとって一つの金字塔的意味をもつものでありながら、不幸な運命を担わされる『歴史と階級意識』において、ルカーチは次のごとく主張している。「このように、歴史的、社会的現実性にこの方法を限定したということは、非常に重要である。弁証法のエンゲルス的記述から由来する誤解は、本質的に次のような点にもとづいている。つまり、エンゲルスは、ヘーゲルのあやまてる例証にしたがって、弁証法的方法を自然の認識に

も拡張した、ということである。だが、弁証法の重要な諸規定、つまり、主観と客観との相互作用、理論と実践との統一、思考における変化の根拠としてのカテゴリーの基体が歴史的に変化すること等々、といったものは、自然認識には存在しないのである。[5]」このルカーチの主張は、「自然」の概念あるいは弁証法理解について、マルクスとエンゲルスとの間に差異があることを指摘した、最初の発言とみなしてよいであろう。だが、不幸にもルカーチはやがてコミンテルンから非難をうけ、この著作の総体をみずから闇にほうむってしまうことになる。だが、ルカーチ的思考は死滅したわけではない。二〇年代前半を通して、ドイツ共産党（K・P・D）内左派の理論的指導者であり、コミンテルンの支配に最後まで抵抗し、二六年、左翼反対派としてKPDから除名処分をうけるにいたったコルシュは、ルカーチと同趣旨の論旨を次のように展開している。「ヘーゲルにあってはもちろん『物理的自然もひとしく世界史に介入する』とすれば、マルクスは自然を最初から社会的カテゴリーで把握している。物理的自然は直接に世界史に介入するのではなくて、そもそものはじめから人間と自然とのあいだだけでなく、同時に人間と人間とのあいだでも進行する物質的生産の過程として、間接的に介入する。あるいは、哲学者にもわかるようにいえば、あらゆる人間活動に先立つものとされる純粋な自然にかわって、マルクスの厳密な社会科学では、いたるところに社会的「物質」として、人間の社会活動によって媒介され変形された自然、物質的生産としての自然が登場する。[6]」

だが、ルカーチ――コルシュのこのような問題提起は、デボーリン――スターリン的ソヴェト・マルクス主義哲学の完成強化過程と軌を同じくしており、西欧（特にドイツ）共産党に対するコミンテルン支配が強化貫徹される過程と同一時期にあたっていたため、ルカーチ――コルシュの系譜は、二〇年代、三〇年代において正当な評価をうけることはなかった。もっとも、現実政治過程からやや離れた位置にあって、ソヴェト・マルクス主義哲学に対して鋭い批判的姿勢を示し、なおかつルカーチ――コルシュのマルクス主義哲学とも異った立場をとるE・ブロッホのような

人物もいなかったわけではない。マルクス主義における「自然」の概念を、むしろシェリング的自然として把握するブロッホは、しかしながら、二〇年代・三〇年代とも、政治過程は言うにおよばず、アカデミズムにおいても、一部の思想集団への影響をのぞいては、それほど影響力をもっていたわけではない。ブロッホのおよぼした影響力とは、ここでとりあげるフランクフルト学派およびその戦後の後継者たちに限定されていたわけである。ソヴェト・マルクス主義に対決するルカーチ――コルシュの系列とブロッホとの影響下に立つフランクフルト学派が、ことマルクスの「自然」の概念をめぐって、どのような問題点を提起しているのかを、シュミットの『マルクスの学説における自然の概念』の内容を紹介することによって、新ためて尋ねてみることにする。

二、マルクスの「自然」概念

『マルクスの学説における自然の概念』の第一章第一節は、「マルクスの唯物論の非存在論的性格」[7]という表題をもっている。何故にマルクスの唯物論が存在論的であれ、非存在論的であれ、このような伝統的形而上学的用語によって語られねばならないのか。その辺の事情から問題をとき起してみよう。

前節で若干述べておいたように、ヘーゲル哲学における「自然」の位置づけは微妙なところにある。そもそもヘーゲル哲学において絶対的優位をもつものは、イデーであり、その最高の発現形態としての絶対精神である。このイデーにせよ、絶対精神にせよが、自己展開をとげることによって様々な段階的現象形態を露呈し、最後に復び絶対精神に還帰することによって、イデーはその自己運動を完結し、その完全な姿を現わすことになる。ところで、「自然」と呼ばれるものは、このようなイデーの自己展開の過程で、どのような位置に位するのであろうか。ヘーゲルに言わせると、「自然」において、理念はいまだ概念にまで純化されない、直接的形態をとっている、という。つまり、ヘ

ーゲル哲学における「自然」は、決して自己自身でそのあり方を決定しうる存在ではなく、普遍的なものとしてのイデーが、絶対精神へと還帰するために、一時的に経る無自覚的段階（概念（ベグリフ）にまで純化されないとは、自覚的に把握（ベグライフェン）されていない、という意味である）であり、一時的に経るある外在化の契機にすぎないものである。とするなら、ヘーゲル哲学における自然は、イデーから離れて、即自的にある自然のことではなく、あくまでもイデーによって支えられたもの、精神を実体としてもつものといわねばならない。したがって、ヘーゲルは次のように断定することができたのである。「あらゆる物質的なものが、自然のなかで作動しながら即自的に存在している精神（ガイスト）によって止揚され、そしてこのような止揚が精神（ゼーレ）の実体のなかで自己完了することによって、一切の物質的なもののイデアリテートとしての精神（ゼーレ）は、まったく非物質的なものとして立ち現らわれてくる。そうすれば、物質と呼ばれているすべてのものは、精神（ガイスト）からは非独立的なものとして認識されることになる。」[8] それ故、ヘーゲルが当時の自然科学の水準に対する己れの知識を誇示するあまり、精神（ガイスト）なき自然をとりあげ、この自然相互の間に、本来イデーの展開にのみ妥当するはずの、彼の弁証法を適用させて得意になっていたということは、彼の本来の趣旨からすれば、邪道に陥ったといわれてもしかたのないことであった。いずれにせよ、ヘーゲルにおける自然の概念の把握は、伝統的な意味で存在論的であったといえる。

このような伝統的形而上学につながるヘーゲル哲学に対して、周知のごとくフォイエルバッハは、むしろ、挑戦的に非哲学（ヘーゲルに代表される講壇哲学に対する反感くらいの意味）的立場から出発しようとする。フォイエルバッハにとって、「われわれのなかにおける思弁をはなれた、非哲学的な、絶対に非スコラスティックな本質とは、感覚主義の原則」[9] であった。この原則に立って、フォイエルバッハはヘーゲルの絶対精神が類としての人間本質の自己投影にすぎないことを主張したのであった。したがって、フォイエルバッハにおける「自然」はイデーや精神を離れ

て、即自的に存在するもの、感覚できるものと規定されることになる。しかも弁証法などを問題としなかったフォイエルバッハにとって、この即自的自然、感覚できる自然のもつ法則性、存在様態などは、まったく考慮の埒外のことであった。マルクスの自然概念の成立のためには、ヘーゲルの存在論的自然観が、まず、フォイエルバッハ的な非存在論的性格のものに還元される必要があった。シュミットが言うマルクスにおける「自然」概念の非存在論的性格とは、後年のマルクス主義者たちが、「自然」概念を再び存在論的に取り扱うようになったことへの非難の意味がこめられているとともに、以上述べたような「自然」概念をめぐる近代哲学史の一コマを背景においての発言である、ことにも留意すべきである。

ところで、これもまた周知の事実であるが、フォイエルバッハの言う自然的人間（あるいは自然と人間との統一）とは、受動的静観的な人間のことであり、実践的活動的人間のことではない。これに反して、マルクスにとっての「自然」は人間的実践の契機と受けとられ、人間的実践の契機であるかぎり「自然」は歴史的社会的位相にくりこまれることになる。自然を人間的実践の契機とする発想は、どこから由来するであろうか。シュミットは、このような発想の由来をドイツ観念論に求める。つまり、即自的「自然」にせよ、「世界」にせよ、人間にとって外在的なものは、ドイツ観念論においては、すべて主観（主体）――たとえ、この主観（主体）によって意味されるものが何であれ――によって媒介されたものと受けとられたのであるが、マルクスは、このようなドイツ観念論の思弁的遺産を受けついだというのである。もっとも、フォイエルバッハの感覚的人間を社会的歴史的人間と置きかえたマルクスにとって、自然や世界を媒介する主観（主体）は、抽象的な人間であるはずはない。「対象世界の創造者とは、社会的歴史的な人間の生活過程である」[10]ということになる。シュミットは、このようなマルクスの自然と主観（主体）との関係を、主としてパリ草稿を中心として展開する。

だが、マルクスは他方、「経済的社会形態の発展を自然史的過程」として理解したということも事実である。では、「自然」を人間的実践の契機としてとらえたということと、社会形態の発展を自然史的過程としてとらえたということとは、矛盾しないであろうか。何故なら、前者の主張は、自然をあくまでも社会的歴史的なものに従属させた主張であるし、後者の主張は、あたかも社会的歴史的なものを即自的自然の一部に繰りこむことを意味するかのごとき主張だからである。シュミットは、マルクスおよびエンゲルスにおける「自然史的」という概念が、C・ダーウィンの諸研究に触発された用語であることを主張する。したがって、自然史的に考察するということの意味内容は、歴史的経過の考察に何がしかアプリオリーな構成原理や心理主義的説明原理をもってすることを排し、「厳密な必然性にもとづいて」考察するというくらいのものであるという。(11) それ故、この「自然史的」という概念をそのまま文字通りに受けとり、即自的自然の展開のままに、ないしはそのような自然の展開に即して社会や歴史を見るなどということは、マルクスの意図したところではない、というのである。そのような観方は、むしろ悪しき社会ダーウィニズムに陥むことになる。このことは、マルクスがクーゲルマンあての書簡でも述べている通り、マルクス自身が否定したことではなかったか、というわけである。

シュミットのこのような指摘にも拘らず、人類史を社会的歴史的に把握することと、自然史的に把握することとは違うのではないか、という疑問はあい変らず残るであろう。たとえ後者が「厳密な必然性にもとづいて」考察するという意味だけのことだといっても、「厳密な必然性」が前者にもそのまま適用されるものかどうか。むしろ、「厳密な必然性」をもととする自然史的考察と、社会的歴史的考察とには明確な一線があり、マルクス自身においてこの両者の考察方法は混乱していたのではないか、といった疑問がそれである。だがシュミットに言わせると、考察方法についてのこのような分類は、新カント学派、特にそのうちの西南学派によって持ちこまれた思考性であり、そもそもマ

ルクスの思考性にはなかったものである、という。この点は、シュミットの指摘する通りである。マルクスには自然と歴史を分離したり、自然科学と歴史科学とを原理的に区別したりするような思考性は存在していなかった。その論拠をシュミットとともに、「ドイツ・イデオロギー」の次の箇所から引いてくることもできるだろう。「われわれは、ただ一つの科学を知っているだけである。即ち、歴史の科学がそれである。歴史は、自然の歴史と、人間の歴史とに分けられる二つの側面から考察することができる。この二つの側面は、しかしながら、分離しえないものである。人間が存在する限り、自然の歴史と人間の歴史とは、相互に条件づけ合うものである。」[12] 要するに、マルクスにとって、自然と歴史とは相互に分離されたものではなく、人間は常に歴史的自然と自然的歴史とを持ちあわせている、というのである。歴史的自然とは、再度言うが、自然の担わされている歴史的現実性（ヴィルクリッヒカイト）のことであり、自然的歴史とは、人間の担わされている自然的現実性（ヴィルクリッヒカイト）のことであるのは言うまでもない。したがって終極のところ、マルクスにとっては、新カント的に分離された自然科学と歴史科学とはそもそも同一の基盤、同一の方法によるものだというのではなく、人間に関する固有の科学(die natürliche Wissenschaft vom Menschen)と人間的な自然科学（die menschliche Naturwissenschaft）とは同一のものだ、[13] といったまでのことである――これが、シュミットのマルクス解釈の結論である。

三、エンゲルスの「自然」概念

マルクスが、歴史的自然といい、あるいは自然的歴史といった場合、その両者の根底に人間の歴史的実践がふまえられているのは事実である。とすると、エンゲルスの「自然」概念の方はどうであろうか。『自然の弁証法』『アンチ・デューリング』の内容に代表されるごとく、エンゲルスの即自的自然の把握がマルクスと異質のものであること

の指摘は、第一節においてすでに述べておいた。戦後のフランクフルト学派で、この線にそって研究を進めていた人物はI・フェッチャー（勿論、マルクーゼの『ソヴェト・マルクス主義』をまずあげなければならないのだろうが、マルクーゼは戦後ドイツにはいないし、それに彼自身はむしろ戦前の世代に属するといってよい）であった。[14] フェッチャーは、エンゲルスが自然科学的認識もまた社会的諸条件によって制約されるものであることについての視点を、まったく持ち合せていなかったと論難している。エンゲルスが、自然科学的認識をこれほどまでに重視し、このような認識にマルクス主義の基本的性格をすえようとした事情は、当時の政治的、思想的情況からくる世界観、しかもマルクス主義的世界観の要請にかられたがためであるという。しかし、それにも拘らず、フェッチャーの言によると、エンゲルスは「社会的に条件づけられた自然概念」と「ドグマ的——形而上学的自然概念」とを相互に無関係のまま並列させていたというのである。この点については、フェッチャーの指摘する通りである。例えば、「自然の弁証法」においては、猿から人間への移行過程における対自然関係に「労働」が媒介項として入れられている。労働を媒介にした自然は言うまでもなく人間的実践の契機としての自然、社会化されるべき自然であるのは言うまでもない。他方、「自然の弁証法」には、例によって例のごとく酸素と水素の化合物である水の形態変化が弁証法論理をもって説明されている。この際の弁証法論理は、労働を媒介とする自然と人間との弁証法とは別種のものであるし、勿論、水の原子としての酸素と水素とが、労働の契機となる自然とはまったく別種のものであるのは当然である。

シュミットはこのフェッチャーの見解を受けつぎ、問題は、エンゲルスがマルクスの自然把握をこえて、「ドグマチックな形而上学」的把握に陥った点であるという。[15] シュミットは、マルクスとエンゲルスとの「自然」概念をめぐるこのような分岐が、五〇年代後半、具体的には一八五八年頃からありえたとする。五八年というのは、マルクスとエンゲルスとの往復書簡を根拠とした立論である。マルクスは、「ドイツ・イデオロギー」時代においても基本的な

問題であった自然史と社会的実践の契機としての自然との関係を、「資本」の分析のなかで解き明かして行く。これに反して、エンゲルスの方は、同じく「ドイツ・イデオロギー」(周知の通り、本書の本文はエンゲルスの手になるものである)段階から、弁証法的カテゴリーを自然現象に適用し、もって当時の自然科学の成果を解釈して行くわけである。

フェッチャーはこれ以降のエンゲルスの「自然」観を、当時一般的であった通俗的——唯物論的——一元論的諸概念の集大成されたものときめつけるのであるが、シュミットは、それよりもむしろ、エンゲルスがフランス啓蒙における唯物論の体系的形態を彼なりの弁証法をもって構築しようとしたもの、と受けとる。[16] フランス啓蒙のもつ素朴な唯物論を弁証法をもって再構築しようとした際の原則が、あの三つの原則、つまり、量より質へ、対立物の統一、否定の否定、という原則であった。しかし、いずれにせよシュミットに言わせれば、このようなエンゲルスの態度は、当時の自然科学の結果を解釈し、記述する際のある可能性であるにすぎず、自然科学の方法論とは何らかかわり合いのないものであるという。エンゲルスのこのような「自然」は、まさに素朴実在論としての自然であるのは言うまでもなく、エンゲルスも自然史と人間史との区別をもうけないといいつつ、素朴に実在する事実としての自然に重きを置き、思考、意識をもって「事実(エンゲルスにとっては、即ち自然)の弁証法」の反映を受けたものと考えていたのは、多くの人々が指摘する通りである。だが、マルクスにとっては、反映を受ける意識は、単に事実の反映を受けるだけでなく、人間の「実践的、批判的」活動の一契機である。また、マルクスの問題とした客観的、経済的弁証法には、それ自体のなかに活動する主体の精神がこめられていたのを忘れてはならない。したがって、エンゲルスの人間理解が自然過程の受動的反映、自然過程の進化の産物ととられるだけであるのに反して、マルクスの人間理解が能動的実践的なものとなるのは言うまでもない。

ところで、自然をポジィテーフな世界原理として存在論的に想定し、そのような自然のディナーミッシュな弁証法的運動をとくエンゲルスの主張は、当然にも「自然自体」を汎神論的物活論的に理解する態度と近似的な、あるいは同一の立場に立つことにならざるをえない。だが、このような自然理解は、当然にも素朴な唯物論、あるいはエンゲルスが本来考えていた唯物論とはほど遠いもの、唯物論的立場自体の放棄にいたらざるをえないことになる。ただ、エンゲルス自身としては、「自然」の追求をそこまで徹底して行なわなかったというまでのことであるし、「自然」の追求を徹底すれば、そのような立場にまでいたりつくということに無自覚的だったまでのことである。このような指摘は、ドイツでは、エルンスト・ブロッホやフェッチャー、フランスではサルトルやメルロー・ポンティーがつとにおこなっていたことであった。

エンゲルス的自然の体系には、このほかにも問題がある。というのは、彼の自然の体系を構成する論理は、弁証法などと呼ばれるべきものではなく、たかだか相互作用（die Wechselwirkung）とでも呼ばれるべきものによって成り立っているにすぎない。そしてまた、エンゲルス自身も認めているこのような相互作用などというカテゴリーは、せいぜいのところ、機械的因果関係的思考と弁証法的思考との中間に位いしているカテゴリーであるにすぎない。[17] 以上のごとく、エンゲルス的「自然」概念に対するシュミットの攻撃は、「自然」そのものの追求に哲学以前的平板さが目立つこと、更にはその論理が弁証法といいつつ、その実、非弁証法的なものであるにすぎないことといった、全面的否定に傾くことになる。

要するに、エンゲルスとはちがって、マルクスにとっての人間に対立する物質としての自然は、人間の活動目的からみて、把握されるべきだがいまだ把握されるにいたっていない物質であったにすぎない。それ以上の存在論的自然などは、マルクスにとってスコラスティックな論議の対象以外の何ものでもなかった、というわけである。（未完）

註

(1) 「中央公論」昭和四六年四月号、「理想」昭和四五年十二月号、「社会思想」昭和四六年創刊号、などの拙稿を参照されたい。

(2) シュミットの著作目録は別に掲げておく。

(3) Alfred Schmidt : Der Begriff der Natur in der Lehre von Marx, Europäische Verlagsanstalt, Frankfurt. a. M. 1971.

(4) Anhang としての論文、"Zum Verhältnis von Geschichte und Natur im dialektischen Materialismus" は、"Existentialismus und Marxismus" edition Suhrkamp, Frankfurt a. M. 1965 のなかの彼の論文である。

(5) Georg Lukács : Geschichte und Klassenbewußtsein, Luchterhand 1968, s. 175.

(6) Karl Korsch : Karl Marx. hrg. von Götz Langkau. Frankfurt/Wien 1967. ただし本文中の訳文は野村修氏、未来社『マルクス』のものを使わせてもらった。

(7) A. Schmidt : Der Begriff der Natur, I. Kapitel A) Der nicht-ontologische Charakter des Marxschen Materialismus.

(8) Hegel : System der Philosophie, III, Glockner, s. 54

(9) Feuerbach : Vorläufige Thesen zur Reform der Philosophie Leipzig 1950. s. 74

(10) A. Schmidt ; Der Begriff der Natur, s. 20

(11) ibid., s. 38

(12) 「ドイツ・イデオロギー」のこの箇所は、三二年MEGA版 Bd. V. s. 567. には出ているが、五三年東独版には欠落している。

(13) A. Schmidt : Der Begriff der Natur, s. 45. しかしこの本文は Nationalökonomie und Philosophie からのものである。

(14) I. Fetscher には Marxismusstudien, Tübingen 1957. があり、本文中でも述べておいたごとく、A. Schmidt の研究に大いなる影響を与えている。

(15) A. Schmidt : Der Begriff der Natur, s. 46.

(16) ibid., s. 48.

(17) ibid., s. 57.